

枕草子作者への批判について

今井卓爾

一

隨筆といわれる「枕草子」の作者について批判する時に、「枕草子」に白紙でたよりすぎることに、ある疑念が持たれます。

「枕草子」や日記文学のように、作者の体得した事実を主にした作品には、多くの事実の中から作者によって選択されたものが書かれることになり、書かれなかった事実がたくさんあったことを予想しなければなりません。ですから、作品以外の世界も考慮しながら享受するのではありません。作品の享受としては片手落になるわけで、十分であるとは言えません。そのためには作品の周辺の事実をできるだけ承知する必要があります。作品批判もむろんそうですが、作者を批判する場合にはいっそうこのことが痛感されてきます。

「枕草子」の作者が清少納言であることは、この作品自身が示していることですし、また「栄花物語」（根合）や「無名草子」によってもまちがいはないと考えられます。清少納言の経歴については未詳の点が多く、その生没も確認されていません。信頼でき

る主な資料としては「枕草子」があるばかりで、その他に若干のものをつけ加えることができる程度です。証明材料は未詳ですが従来の伝記としては、

清少納言。肥後守清原元輔女。一条院皇后宮女房。（中古歌

仙三十六人伝）

清少納言。皇后定子侍女。摂津守藤原棟世妻。（清原系図

△統群書類従Ⅴ）

清少納言。初仕皇后定子。後为上東門院侍女。嘗著枕草子。

老年落魄。卒於筑州民門云。（扶桑拾葉集）

などがありますが、どの程度信頼してよいのか確答はできません。ある程度信頼度の高い資料から判断されている結果からみますと、清少納言は清原元輔の女で、橘則光、藤原実方、藤原棟世などと順次結婚したことがあるらしく、その間に三名くらいの子女はあったものと推定されていますが、生没については未詳です。だいたい康保年間（九六四—七）に出生したと考えられますが、没年については推定できません。宮仕に出た時期は正暦年間（九九〇—四）ですが、それ以上くわしいことはいまのところ決

定できかねます。「枕草子」の「鳥は」の段に、

十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことにさらに音せざりき。
と驚のことを言っているのによりますと、少くとも十年以上の宮
仕になり、出仕は正暦初年でない和不合理ですし、また正暦五年
二月二十日の積善寺の一切経供養の段にある、

まだうひうひしきほどなる今参などはつつまじげなるに……

によりますと、正暦末年でない和文意が通じなくなります。正暦
年間に仕出し、長保二年（一〇〇〇）中宮定子崩御まで奉仕した
ものと考えられます。この間の清少納言の年齢は、二十才台後半
から三十才台半ばくらいに想定され、中宮は約十才年下であった
ようです。崩御後の動静について一、二伝えられているところも
ありますが、いまは確認することはできません。清少納言の晩年
についてはかなりいろいろなことが伝えられていますし、中には
かなり確実と考えられることもまじっているようです。

年老いて、人にも知られでこもりゐたるを、たづねいで
たれば、

とふ人にありとはえこそいひいでねわれやはわれとおどろか
れつつ（異本「清少納言集」）

山のあなたなる月を見て、

月みれば老いぬる身こそかなしけれつひには山のはにかくれ
つつ（同）

元輔が昔住みける家のかたはらに、清少納言すみしころ
雪のいみじくふりて、へだてのかきもなくなつたふれて見わ
たされしに、

あともなく雪ふる里のあれたるをいづれ昔の垣根とか見る

（赤染衛門集）

などをはじめとして、「清少納言が月の輪にかへりすむころ……」

（公任集）などはいいたい信頼してよい資料です。このほかに、

はるかなるあなかにまかりて住みけるに、青菜といふ物乾か
しにとに出づとて、「むかしの直衣姿こそ忘れね。」とひとり

ごちけるを見侍りければ、あやしの衣きて、つづりといふも
の帽子にして侍りけるこそ、いとあはれなれ。（無名草子）

清少納言、零落之後、若殿上人アマタ同車、渡彼宅前之間、

宅体、破壊シタルヲ見テ、……簾ヲ攝上ゲ、如鬼形之女法師

ノ顔ヲ指出ス……駿馬之骨ヲ買ハズヤアリシト、……。（古

事談二臣節）

などは参考にしなければならぬものです。この「無名草子」所
伝に似たことは、能因本系「枕草子」（三条西本、富岡本など）の
奥にも書き伝えられています。これらによってみますと、清少納
言は老婆になるまで生きのび、都心を離れたところかなにかに落
ちぶれたわび住いをしながら、結局いつもわからないうちに没
したものと考えられます。誇張した書き方のものもあるでしょう
が、大勢はこうした晩年で終ったものと想像してよいでしょう。
清少納言の仕えた中宮定子は、藤原道隆の女で、その略歴はつ
ぎのようです。

貞元元

出生

正暦元・一・二五

入内（一条帝）

同 二・一一

女御

同 一〇・五 中宮

長徳元・四・一〇 父道隆薨

同 二・四・二四 兄伊周太宰権帥

同 五・一 落飾

同 一二・一六 脩子内親王出産

長保元・一・一・七 敦康親王出産

同 二・二・二五 皇后

同 一二・一五 媛子内親王出産

同 一六 崩(二五才)

清少納言が仕えた時にはすでに中宮は入内後であり、関白道隆を父としてははばれしい立場にあったものと言えますが、道隆がなくなつてからは、次第に落目になり、ことに花山院事件がおこつてからはますます道長の圧迫が加わつて、兄伊周の追放、ついで落飾ということにまでなつてしまいました。伊周は翌年ゆるされて帰京しましたが、すでに実力は完全に道長の手中にあつて、中宮のためには大きなささえにはならなかつたのです。それだけではなく、同じ一条帝の許に道長の女彰子が長保元年に入内し、女御となり、翌年定子が皇后になるとともに彰子は中宮になつていきます。中宮は一男二女を出産しましたが、第三子を出産した翌日なくなつてしまいました。中宮の環境は父道隆の死を境にして急転回したわけで、清少納言は主人のこのことなつた二つの環境の近くに身をおいて奉仕していたわけですから、中宮やその一家の喜びも悲しみも十分に承知していたものと考えてよいでしょう。

二

「枕草子」は三百余段から成っていますが、どの段の年代も明らかであるわけではなく、わずかに一割余の段の年代が推定されるにとどまっています。それらの中でもっとも早いものは三三三(小白河といふところは、小一条の大將殿の御家ぞかし)で、寛和二年六月のことと認められます。もっともこれ以前のことで、伝聞として書かれているものには一七七段(村上の前帝の御時に)や一七八段(御形の宣旨の上に五寸ばかりなる殿上童の)があり、また二二二段(清涼殿の丑寅の隅の北のへだてなる御障子は)の中にも「円融院の御時に」や「村上の御時に」のことが書かれています。これらはいずれも清少納言の直接の見聞体験にはなっていない。年代が判明される体得の段としてはやはり三三三段がもっとも古いものになり、清少納言の宮仕数年前のことに属します。永延・永祚年間には年代の明らかな段は見当らず、正暦初年の記事も割合に少いのですが、同四年ころからようやく増してきて、長徳元・二年には年代のわかつている段がことに多くなっています。その後では長保二年が比較的多くなっていますが、この年以後の年代の記事と明らかに推定できるものはありません。以上のことは「枕草子」全段のうち、年代の推定される一割余の段について言えることです。これをもとにして結論を急ぐことはもちろんきわめて危険なことではありますが、大勢は推知することができないのではないかと思います。正暦年間には清少納言が中宮に宮仕をはじめた時であり、ことに正暦五年はようやく宮仕

になれた時期でもありました。長徳元年は中宮の父道隆の死から急転して、中宮やその一家が喜びから悲しみにつきおとされた年で、以後悲運から脱することができなかったのですから、清少納言の宮仕年間の半分以上は中宮の逆境時代であったわけです。長徳・長保の六年間は、中宮にとってはもちろんのこと、中宮に信頼され、誠実をもって仕えたと考えられる清少納言にとっても、けっして晴々しい時期ではなかったはずです。

「枕草子」の中で時期が判明している段のうち、中宮が時の人であった時期のものはとにかくとして、中宮が時の人でなくなつたのちの記事がどのようなものであるかということは、この作品の著作態度や作者清少納言の人間性を考える上に大切なことであるのはいうまでもありません。ことに長徳元年四月十日道隆の死は明暗を区画する日であったのです。この日以前の記事と考えられるのは一〇〇段（淑景舎東宮にまゐり給ふほどのことなど）と七八段（頭中将のすするなるそらごとを聞きて）とであり、九一段（ねたきもの）の中にも同様に認められる部分がいっています。一〇〇段は二月のことで、中宮やその妹で東宮の女御として入内した淑景舎原子をはじめ、道隆夫妻など一門一族の繁栄の絶頂を示すような空気にみちている長文の段であり、七八段も二月のことで、頭中将と清少納言とが仲たがいをし、やがて清少納言が頭中将を漢詩句のことでやりこめてから和解ができることを詳細に描写している段で、いずれも中宮側近奉仕者としての清少納言の得意の場面であったものと考えられます。四月以後の記事としては一五六段（故殿の御服のころ、六月のつごもりの日）、一三

〇段（故殿の御ために月ごとの十日経仏など供養せさせ給ひしを九月十日）、一二三段（はしたなきもの……八幡の行幸のかへらせ給ふに）などが明らかです。一五六段は、故道隆の服喪中、方角が悪いので太政官庁の朝所に中宮のお伴をして行った時のことであり、一三〇段は、同じく服喪中、供養の日、藤原齊信の誦詩に関連して清少納言と二人の交情を述べており、一二三段は「はしたなきもの」の一部で、一条帝の八幡行幸の帰るさに、御生母に礼をつくしたのを拝見してはしたないほど感激したことをのべています。翌長徳二年の記事としては七九段（かへる年の二月二十余日宮の職へ出でさせ給ひし御供にまゐらで）と一三八段（殿などのおはしまさでのち、世の中にこといできさわがしうなりて）とがあり、一二八段（頭弁の御許より）、一五七段（宰相中将齊信宣方の中將道方の少納言など）、三〇一段（この草子……左中将まだ伊勢守ときこえし時）などもこの年のことと考えられます。七九段は清少納言と当代の代表的文化人頭中将藤原齊信との交情を物語や漢詩などに託して描いており、一三八段は、兄の追放、自分の落飾などの不幸が中宮やその身辺におこったころのことを書いています。清少納言は、「なにともなくうたてありしかば、久しう里にあた」のでしたが、この理由は清少納言が道長方に内通しているといううわさが立っていたからでした。中宮からありがたい便りをいただき、やがて出仕した清少納言への誤解がとけたことを感激的に描いています。長徳三年の記事として明らかなのはないうですが、九九段（雨のうちはへふるころ）や一三一段（頭弁の職にまゐり給ひて）などがそれとも考えられます。翌

四年の記事としては、九五段（五月の御精進のほど職におはしますころ）と八三段（職の御曹司におはしますころ）とがあり、四七段（職の御曹司の西面の立部のもとにて）や九六段（職におはしますころ、八月十余日の月あかき夜）などもこの年のことと考えられます。九五段は、賀茂の奥にはとぎすを聞きに行った清少納言が、歌人元輔の女であることにかこつけて、和歌をよまなかったことを描き、八三段は、雪山がいつまで残るかを言いあてっこをした時、もっとも長く言った清少納言の言がみごち的中したことを描いた長文の段で、この年の記事には職の御曹司でのごとが非常に多くあります。さらに長保元年のものとしては一三二段（五月ばかり月もなういとくらきに）と六段（大進生昌が家に宮の出でさせ給ふに）とがあります。一三二段は竹にちなんだ漢文学の知識で清少納言が藤原行成をはじめとする人たちから賞讃されたこと、六段は同じく漢文学の知識やなまりことばで平生昌をやりこめたことを書いています。翌長保二年、定子は中宮から皇后になり、年末出産後なくなりす。当年のこととしては二三〇段（一条の院をば今内裏とぞいふ）、二二五段（三条の宮におはしますころ五日のさうぶのこしなどもて参り）、一〇段（今内裏の東をば北の陣といふ）などがあり、七段（うへにさぶらふ御猫はかうぶりにて）や二七六段（成信の中將は入道兵部卿の宮の御子にて）もこの年のことと考えられます。二三〇段は一条帝の笛についてのおもしろい話、二二五段は五月五日の行事にちなんで中宮清少納言主従が相互に親しんでいる話、一〇段はのつばの僧都について清少納言がよくおぼえていた話などで、いずれも

短文です。以上の年代がはっきりしている段について総合的に言うことができることは、中宮の悲運を悲運として描出するとか、悲しんだり怒ったりして同情的態度に出るとかのことはほとんどしていないで、さらっと読み通していくならば、これらの記事の背景に中宮の悲運という現実があることにさえ気がつかないままにいつてしまいうです。むしろ悲運とはうらはらな、ほのぼのとした世界さえ考えられないことはないほどに屈托のない文字がならんでいます。史実を承知していれば、奇異にさえ思えるほどの明るそうな吹語りなどがたくさんありますが、史実を背景にしてこれらをよむと、むしろ懸命な作者の姿さえもうかできます。中宮を尊敬し、主従の相互理解の深さはこれらの段によつてよみとることはできますが、それだけに清少納言の虚勢とも見える表面的態度には、むしろいたいたしいものさえも読者に与えるにちがひありません。中宮の身辺のことを清少納言がうかつで知らなかったとすればべつですが、そういうことがありえないことは、これらの段の事実によつても十分に推測できるところです。

三

「枕草子」は、人間として、また作者としての清少納言をみる上にもっとも大事な作品ですが、その実態をたしかめるために、なるべく近い時期の批評も参考になければなりません。清少納言とだいたい同時代の紫式部の日記には、

清少納言こそしたる顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真字書きちらして侍るほども、よく見ればまだいと

たへぬことおほかり。かく人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見おとりし、ゆくすゑうたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすぐすろなる折も、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。

と言っています。かなり悪しざまな批評で、ものの本体を見きわめて自分のものになっているとは考えられず、目に見えるところを過大にほらしげにしている点を指摘しているわけで、この点は「枕草子」によってもうかがわれるところです。紫式部は清少納言よりも十才位年少で、性格的にも対称的なちがいがあったように考えられます。また宮仕という公の場における対立感もあったと見なければなりません。よほど広量でないかぎりよく批評できるとは思えないのが紫式部ですから、こういう批評のできることは容易に予想することができるわけです。はじめから好意的に見ようとしなない、というようなところがよみとれます。清少納言の晩年のことにふれていますが、これは事実を承知の上で言っているのか、憎まれ口のついでに言っているのか明らかではありませんが、清少納言が中宮への宮仕をやめてから「紫式部日記」が書かれるころまでには十年かそれ以上の時が経っているわけであり、また清少納言の方が年長であることを考えるならば、紫式部はある程度清少納言の晩年を承知して書いているとも考えられます。「栄花物語」（鳥辺野）には、

内わたりには五節臨時の祭などうちつづき、今めかしければそれにつけても、昔忘れぬさべき君達など参りつつ、女房たちども物語しつつ、五節の所所の有様など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひを捨てがたくおぼえて、三人づつつれてぞ常にまゐる。

と言っています。これは長保二年、中宮がなくなる少し前のことであり、紫式部はまだ彰子の許にたぶん出仕していなかった時期にあたります。中宮の立場は不遇であり、しかも妊娠による苦しみも加わって、「いともの心細くおぼされて、あけくれば御涙にひちてあはれて過ぎせ給ふ」（「栄花物語鳥辺野」）ころのことであるのに、内裏あたりでかなり強気の態度をとったものと見えます。こういう点は「紫式部日記」の批評とも一致しますし、「枕草子」によってもうかがうことができます。けれども一方には、のちに「無名草子」の作者が、

さばかりをかしくも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書きしるしたる中に、宮のめでたくさかりにときめかせたまひし事ばかりを、身の毛も立つばかり書きいでて、関白殿うせ給ひ、内の大臣流され給ひなどせしほどのおとろへをば、かけても言ひいでぬほどのいみじき心ばせなりけん人……。

と言っています。多くの史実を背景にして「枕草子」をよむならば、この批評のようなことは事実としてうけとらなければなりません。もちろんこの批評の中には清少納言を善意で迎えようとする

るところがないわけではありませんから、多少の誇張をのぞくなら、この批評はそのまま受け入れてもよいものであると考えられます。以上はだいたい清少納言の主要な作品「枕草子」からも考えられますが、このほかの作品としては流布本「清少納言集」(群書類従所収)異本「清少納言集」(書陵部蔵)があり、その他勅撰和歌集所収歌七集一五首などがあります。歌人としての業績は実数として約五〇首ほどになります。「枕草子」以外の、主として歌にあらわれているところからみますと、さきに晩年の歌を二首詞書とともに示したように、「枕草子」に表面あらわれているような吹語りや強気はほとんど見えないようです。どちらかという、当時の多くの人たちと大差のない平凡な作者がうかんできます。一見作者がちがうのではないかとさえ思えますが、一面には表現や表現のものになっている素材、著想のちがいがあっても心得ておかなければなりません。

「枕草子」にえがかれている世界は、時代判明の段から推定しますと、清少納言の宮仕から中宮がなくなるまでの十年間足らずであると言えます。若干前後の広がりをおもひとして、十数年間の作者の体得がとりあげられていることになり、二十才台の半ばから三十才台の半ばまでが主要時期にだいたいあたります。これに対して中宮の年齢は十才台の半ばから二十五才までとなり、主従関係としての年齢差は、主人が下、召使が上となっており、むしろ背後には、主人の両親や一族の有力者がひかえています。こうした関係のうちで、主人筋が不幸に見まわれると、召使たち

が散らばってしまうことは、人情の当然としてありうることで、物語の類をみてもこうした機微はしばしば描かれています。けれども清少納言は主人の許は去っておりませんし、「枕草子」には去ってもやむをえない時期のことが特に多くとりあげられているようです。そのとりあげ方は、主人の不幸にふれるようなことはほとんどなく、むしろ主人やその周辺の事情は、不幸以前とかわらないような筆勢でさえもあります。主人の信頼にしても、主人への誠実にしても、また自己の吹語りにしてもこのことが言えます。主人の不幸を承知しなかったのではなく、それにふれなかった、あるいはいってふれようとしなかったようにさえもうけられます。清少納言は公私の生活十年間にいろいろな体得を数限りなくしているわけですが、それらの中からどういふものをとりあげて描くかというのは、ただ作者の意図だけにかかっていることで、あらゆることが書きとめられたわけでもありません。主人の不幸だけを書くこともできるわけですし、それも悪し様に批判することもできるわけですが、反対に同情的に善意をつくすこともできるわけですが、したがって、「枕草子」に書かれていることを清少納言の体得のすべてであると考え、そこから清少納言論や「枕草子」論を展開していくとしたら、その論があらぬ方向につつまってしまう危険が十分にありうるわけです。公にも私にも清少納言がおかれた場や、その場によって体得したことの中から、たまたま清少納言のとりあげたものが「枕草子」に書かれているようなものであって、その他のものは書かれないで伏せられてしまっていると考え、なぜこうしたものだけを、こうした方法でとりあ

げて表現したのであるかをまず考えなければなりません。筆の力によって、描出されたものがすべてであるように思わせるようになっていますが、それにおおれると一辺倒になりすぎます。「枕草子」そのもののみの検討によって結論されてくるものは、清少納言が特に強調した自己の一面であって、けっして清少納言その人ではありません。自分のこういう点を特にとりあげているところに特色をもっている作者であって、作者全体ではなく、作者の特色の一部になるわけです。「枕草子」とか「蜻蛉日記」とかいふような、作者の生の体得が素材や著想になっている作品には、こうした対象への関心が部分的になりがちです。作品の背後をできるだけ承知し、作品を広い環境からよみとることによって、作

者の意図や作品の批判がいっそう客観的な説得力のあるものになると考えます。

注1 「枕草子」の本文は三卷本系（日本古典全書）によりました。

2 清少納言の仕えた定子の呼び名は中宮に統一しました。

3 「とふ人に」の歌（63頁）は「続千載和歌集」（雑中）に清少納言作としてはいい、その詞書はつぎのようです。

老のちこもりゐて侍りけるを、人のたづねてまうできたりければ